特別な支援を必要とする子どもの保育現状と保育士の認識

杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻
石野晶子　場家美沙紀　太田ひろみ

背　景

新生児医療の進歩はより多くの重症新生児の救命を可能にした。一方、医療的ケアが必要な児、発育・発達上で育ちづらさや育てづらさがある児、慢性疾患がある児等、日常的に特別支援を必要とする児が在宅で生活するようになった。特別支援の有無に関わらず乳幼児期の発達支援は重要であり、医療的及び多様なニーズが高い親子に対する地域での発達支援及び子育て支援が求められている。

目　的

研究目的は、特別な支援が必要な乳幼児に対する保育体制、保育の実践における課題を提示し、特別な支援が必要な乳幼児の保育を実践する保育士のニーズを明確にすることである。また、保育により支援が必要な児と家族及び同一集団児の変化を検討することにより、特別な支援が必要な子に対する発達支援及び家族支援の在り方を提言することである。

方法

本研究では以下２調査を実施した。調査①②ともに、対象には無記名自記式質問紙調査を実施した。調査票の配布は2019年３月20日の園長会にて調査趣旨の説明実施後、調査票と説明文書を配布した。回収は、同年４月16日の園長会にて実施した。得られた回答はデータ化し、統計解析ソフトSPSSで分析した。調査にあたり、対象としたA市各保育所園長に調査概要・方法を文書及び口頭で説明を実施、承諾を得た。なお、本研究は杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認（承認番号30-63）と自治体の許可を得て実施した。本発表では、本研究のうち地域の保育所における特別な支援が必要な児に対する保育体制、保育士の不安を主に発表する。

調査①

趣旨：保育所における障害児保育体制、特別な支援が必要な児の保育実践の有無と内容把握、諸機関との縁系体制に関する実態調査。
対象：A市13施設の園長13人。
内容：特別な支援が必要児の受け入れ体制・子どもの実態・保育上の配慮内容・他機関との連携を主に21項目。

調査②

趣旨：保育所勤務の保育士の特別な支援が必要な児の保育に対する認識、困難さ、保育士が必要とする支援等の認識調査。
対象：調査①を実施した園に勤務する保育士230人。
内容：保育経験の有無・保育について感じていること・課題・必要としている支援を主に13項目。

結果

調査①：調査対象13施設中10施設から回答を得た。回収率76.9%。10施設の保育数平均は31人、保育士平均年齢は37.2歳だった。

調査②：保育士230人中174人から回答を得た。回収率75.6%。平均年齢は33.9歳、保育士歴平均は11.8年だった。

表1.特別な支援が必要な子どもの年齢と人数

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計（人）
A			2	3	3	3	11
B				2	2	2	6
C						1	1
D		2	4	3	7	5	21
F			1				1
G						1	1
H				1		2	3
I		2	2	4	5	8	21
J				6		2	8
合計（人）	0	4	9	19	17	24	73

10施設中９施設（90%）で、特別な支援を必要とする子どもが在籍。

特別な支援を必要とする子どもの保育体制

1

・無回答除く８施設、全保育所で加配あり。
・８施設全ての保育所に看護師が配置。
（常勤5施設、非常勤2施設、常勤・非常勤両方3施設）

★加配の方法：8施設中

・７施設でクラス担当保育士を複数配置。チームで保育。
・1施設は、研修を積んだ早期発達支援士・発達支援ファシリテーター資格を取得した職員を中心に関わっていた。

★加配の保育者の職種： 7施設中

・保育士７施設、看護師4施設。

特別な支援が必要とする子どもの保育経験：

経験あり　136人（78.2%）　　経験ない　33人（19.0%）

特別な支援が必要な子どもの保育に関する考え：

肯定的	どちらでもない	支援内容による	否定的
66人（37.9%）	39人（22.4%）	35人（20.1%）	6人（3.4%）

保育に対する不安：

不安ある	不安ない	わからない
138人（79.3%）	4人（ 2.3%）	16人（ 9.2%）

不安に思う上位3項目：

1.緊急時の対応　81人（58.7%）
2.医療的な判断　64人（46.4%）
3.ケアに必要な技術　54人（39.1%）

研修の有無：　病児・病後児保育　あり　28人（12.7%）
障害児保育　あり　95人（43.2%）

困難感の有無（136人中）：　あり　127人（93.4%）　なし　9人（6.6%）

126人が相談すると回答。

困った時の相談相手：
・同僚の保育士108人（85.7%）・園長　83人（65.9%）
・主任保育士　91人（72.2%）・保育所の看護師56人（44.4%）

表2.特別な支援が必要な子どもの診断名及び支援理由

0	年齢	診断名及び支援理由	配慮内容
C	5 歳	・パニック・多動・不注意。 ・思い通りにならない時の感情が抑えられない。	・クールダウンする場の提供。 ・行動の背景を考え、場に応じたコミュニケーション指導。
D	3 歳	・多動。危険行動伴うこと有。喃語のみ。・一人遊びが主。 ・他児との関わり少ない。・集団活動が難しい。	・個別プログラム実施（週2回）。舌の動かし方、1対1での簡単なやりとり遊びの実施。・保護者面談を適宜実施。
	3歳	・知的障害（中程度）・言語、運動発達遅滞。 ・歩行不安定　・理解力低い。	・歩行不安定 → 1対1対応。 ・児の発達レベルに活動を合わせる。→ 玩具の準備。
	4歳	・食物アレルギー。・アナフィラキシー発症歴あり。 ・エピペン処方あり。	・職員全体でのエピペン、内服薬、緊急時対応の研修実施。・調理師、看護師と情報共有。看護師、調理師、保育士でアレルギー会議の実施（月1回）。 ・子どもへのアレルギー教育。
	5歳	・自閉症スペクトラム。・集団活動が難しい。 ・他児との関わりが少ない。・こだわりが強い。	・個別のスケジュール表を使用。 ・集団行動は無理ない程度に参加。参加が難しい時は個別の課題を実施。
	5歳	・自閉症スペクトラム。・多動・会話難しい（一方的・脈絡なし） ・危険行為がないか見守り必要。・指示内容の理解難しい。	・感覚遊具の導入。1人で遊べる玩具の制作。 ・他児との関わりは大人が仲介。活動合間の声掛け及び付き添い。
F	2 歳	・知的障害。・着替えの執着。・意に沿わないと癇癪を起す。	・気持ちを受け止めるよう、都度対応。 ・できることが増えるよう支援。
G	5歳	・二分脊椎・導尿必要。・車椅子で散歩。	
H	3 歳	・ファイファー症候群	・午睡時、Nsがエアウエイ挿入。 ・午睡中は酸素15分毎に確認、記録。鼻吸引。食形態配慮・介助。
	5歳	・自閉症	・個別介入が必要な場面のフォロー（コミュニケーション・生活の切り替え・活動の部分介助）。・体操、マッサージ等、個別活動。
	5歳	・ダウン症	・個別介入が必要な場面のフォロー（コミュニケーション・生活の切り替え・活動の部分介助）。・体操、マッサージ等、個別活動。
I	1歳	・言葉の遅れ。呼名への反応薄い。 ・他者への関心・愛着関係の希薄。・感覚過敏	・1対1の愛着関係の形成。・感覚刺激を入れる。
	1歳	・熱性けいれん多発。・体幹不安定。 ・胎児期に医師から知的な遅れ、耳の障害を指摘されている。	・看護師が常時見守り・体温計測、記録。 ・保健センターと連携。
	4歳	・自閉症（愛の手帳3度）申請中。・療育通院ST・OT ・皆と一緒に行動ほぼ不可能。	・1対1及び0～1歳児レベルで対応。
	4歳	・自閉症。療育通院中。・集団活動できない。・感覚過敏あり。 ・言葉での簡単なやり取り、一方的な感情表現は可能。	・1対1対応。
	5歳	・自閉症スペクトラム。・療育通所（週2日）。・ST通院中。	・個別支援 → ・他児との距離感を知らせる。・姿勢保持するため座席を配慮する。
	5歳	・自閉症スペクトラム。・多動。	・個別指示。集中できる環境づくり。・褒めて伸ばす。
J	2歳	・熱性けいれん。	・予防座薬（ダイアップ）を預かり保管。 ・体調変化時は頻回に検温。
	3歳	・自閉症疑い。母子家庭。	・加配保育士申請。・巡回相談利用。・写真等活用。見てわかる環境づくり。・母親、担当保育士、看護師で随時面談。
	3歳	・肝疾患。	・戸外では加配看護師が付き添い。・昼食時MCTオイル使用。 ・午前中おにぎり捕食。血糖値、必要時測定。 ・保護者、園長、看護師による面談を適宜。
	3歳	・多動。感情起伏激しい。・母子家庭。	・加配保育士配置。 ・保健センター、巡回相談へ連絡・連携。→支援機関を増やす。 ・母親、担当保育士、看護師が適宜面談。
	4歳	・アナフィラキシーショック既往。（ピーナッツ）	・アレルギー疾患生活管理表に従う（除去食）。 ・専用の容器を使用、他児の食事と区別。・献立表を保護者に確認。 ・エピペンを預かり保管。・保護者、管理栄養士、看護師と年1回相談。
	5歳	・房室中隔欠損・総肺静脈還流異常症。 ・ペースメーカー挿入中。	・加配保育士配置。・生活管理指導表に従う。 ・酸素、パルスオキシメータ使用（体調変化時）。

考察

① 調査対象の9割に特別な支援を必要とする児が在籍。　→　疾患や障害等、特別な支援及び配慮内容が多種多様。
② 特別な支援が必要な児に対して、加配の保育士や看護師を配置し対応。→　集団生活の中で周囲の子どもとの調和や対象児の安全保障への配慮。
→　保育士・看護師が役割分担、情報共有。
③ 保育所全体でチームを組み、模索しながら個別な対応を実践。　→　他関連機関との連携が不充分。
④ 保育士は特別な支援が必要な子の保育に困難を感じていた。　→　相談相手の多くは同僚や園長であり保育所内で完結していた。
⑤ 8割の保育士が特別支援が必要な児の保育経験があった。　→　一方、研修を受けた経験が少ない。
⑥ 8割の保育士が保育に対する不安を感じていた。
⑦ 保育士が不安と感じていることの上位は、緊急時やケア技術という医療的な知識や技術であった。→　病児・病後児保育の研修経験が少ない。

課題：① 保育士が研修を受ける機会の充実。
→　・緊急時、特別支援に必要な医療的な知識・技術
→　・研修内容の見直し及び充実
② 地域の関係機関との連携強化。
→　・相談機能の充実、
・専門職による施設支援の充実。